

約268個体のアケビコノハ（ヤガ科）が2015年秋に和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”へ漂着

About 268 individuals of *Adris tyrannus* (Noctuidae) washed ashore on “the Kitahama beach” of the Seto Marine Biological Laboratory, Kyoto University in autumn in 2015

久保田 信

和歌山県田辺湾の湾口に位置する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”に、アケビコノハ *Adris tyrannus* の翅が一定の季節になると打ち上がることがある（久保田，2009，2013，2014）。今回，まずは2015年11月4—12日の期間中，多数のアケビコノハの大量漂着が見られた（図1）。11月4日から6日までの3日間が特に多かったので，この短期間中は1日2回の調査を実施し，それぞれの調査で打ち上がった右，あるいは左の前翅数の最大値の合計を1日に打ち上がった個体数とした（表1；図2，右上と左上）。11月7日から12日までは前翅に加えて後翅の左右も分類し，それら4枚の内の最大値を1日当たりの打ち上げ総数とした。後翅は傷んでいるものも多く，左右の区別が困難なことが多かったので，調査の最初の3日間は一括した（図2，右下）。



図1. 2015年11月4日に和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”の洞門付近へ大量に漂着したアケビコノハの翅

この調査の結果，11月4日には124個体もの漂着があり，5日は前日の半数以下となって40個体，6日にはさらに前日の半分位の23個体となり，この日以降の漂着数全て併せると5個体であった。従って，計7日間で192個体の漂着総数となる（表1）。前翅数はこの7日間の合計が左158枚，右154枚



図2. 2015年11月4日-12日に京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”へ漂着した全ての昆虫類の翅や丸ごと4個体
 上：アケビコノハの左と右の前翅； 左下：アケビコノハの後翅；
 右下：漂着したその他の昆虫類の全て；
 中央：まるごと1個体で漂着したアケビコノハやその他の昆虫のまるごと個体や翅

なので左右ではほぼ同数と言える。しかし、後翅は総数233枚を2で割ると前翅よりも数十枚少ない数になるので、漂着までに多少失われているのであろう。上記の様ならばらになった翅以外に、アケビコノハ1個体には4枚の翅が頭部ともに胸部に付着し残っていた（図2，中央）。しかし、この個体には腹部は無かった。食害されたものと推察される。

表1. 和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”へ
 2015年11月初旬から12月初旬の期間中に漂着したアケビコノハ *Adris tyrannus* の翅

漂着月日	左前翅数	右前翅数	左右の後翅数
11月4日*	43 + 66	58 + 47	167
5日*	20 + 15	7 + 20	39
6日*	1 + 12	2 + 20	23
7日	0		1
8日	0		1
11日	1		
12日			2
30日	4	1	8
12月1日	55	41	133
2日	0	1	4
9日	0	0	2
合計	217	197	382

*: 1日に2回調査

今回漂着した昆虫としては、アケビコノハに加え翅を有するものが混じっており、蛾類数種がまるごと3個体とクサカゲロウがまるごと1個体の漂着がみられた(図2, 中央)。その他は蛾類のばらばらになった翅で、全部で142枚あった(図2, 右下)。なお、この期間の前後日はじめ他の期間中(北浜では毎年ほぼ毎日1回の定点調査を実施中)には漂着は見られなかった。

続いて上記の大量漂着の約1ヶ月後、再度のアケビコノハの大量漂着が見られ、推定73個体が漂着した。11月30日に少数が見られ始め、その翌日の12月1日には左右の前翅よりも多数が漂着した後翅の数の半数から67個体の漂着数を推定した。12月2日には漂着数は激減し、ごく少数となった(表1)。これら3日間の漂着総数は73個体となる。その他は蛾類のばらばらになった翅が全部で14枚あった。

この後、三度目の漂着がただ1回だけがあった。12月9日に後翅が2枚漂着し、その日だけ単発的に起こり、その前後の期間はずっと漂着はいっさいみられなかった。従って、これを2個体として加えると、2015年の漂着総数は少なくとも268個体となる。

今回の記録を含めこれまでこの地点で2009年から2015年までに4年にわたる定期的な漂着があったことになるが、今回は圧倒的に個体数が多いのが注目される。しかも2回に分けて起こったのは注目される。当該地域でなぜこのような漂着が起こるかは、今回の漂着が“北浜”の洞門付近に集中していたのだが、この地点は浮遊物がよく集積されるのでこの事情も効いているのであろう。この他、前報で推察した様に、例えばコウモリ類や鳥類によって、本種が短い出現時期に選択的に捕食されることもあるのかもしれない。

引用文献

- 久保田 信. 2009. アケビコノハ(ヤガ科)複数個体が2008年11-12月に和歌山県田辺湾の浜辺へ漂着. KINOKUNI, (75) : 5.
- 久保田 信. 2013. アケビコノハ(ヤガ科)の多数個体が20013年秋に和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”へ漂着. KINOKUNI, (84) : 25.
- 久保田 信. 2014. アケビコノハ(ヤガ科)が2014年秋に和歌山県白浜町に所在する京都大学瀬戸臨海実験所“北浜”へ漂着. KINOKUNI, (86) : 24.

(くぼた しん 〒649-2211 西牟婁郡白浜町臨海459

京都大学フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所)